

大阪府養研LD教育プロジェクト講演会報告 8月19日

講演会 「文字の習得と読み書き障害における認知機能（基礎編）」
筑波大学 大学院 人間総合科学研究科 宇野 彰 助教授

講演が始まるまでに、会場は300人程の参加者で満員となっていました。読み書き障害についての基本的な考え方の話の後、アメリカのディスレキシアと日本の読み書き障害との違い、共通点についての丁寧な説明がありました。宇野先生の読み書き障害についての長年の研究による、豊富なデータを使った説明は、とても説得力がありました。たとえば、漢字の覚え方として有効な方法を、同じ子どもに違う方法で試し、定着率で比較した報告は、現場での指導にすぐに活用できると思いました。

宇野先生のお話の中で一番印象に残ったのは、「常に子どものやる気、セルフエスティームを大切にしなければいけない」と強調されていたことでした。読み書き障害を考えていく上での基礎の大切さをあらためて教えられました。

第1分科会 「運動あそび教室の実践 - 軽度発達障害の子どもたちに - 」に参加して

吹田市の通級指導教室担当の先生方6人による報告でした。エアーズの感覚統合訓練をベースにした前庭覚、触覚、固有感覚を育てる感覚運動遊びを授業の一環として年間計画の下に取り組みされていました。LD児等にみられる感覚運動における多くの課題をpushし、そのためには、「どんな運動遊びをするのか」、「しかも楽しんでできるものを」とよく考えられていました。運動遊びをした後もその時の子ども1人1人の様子を記録し、指導者側の反省もなされていました。そして「運動技能の基礎になる感覚運動面を引き上げる取り組みであるが、何よりも大切に考えているのは、その子なりに身体を動かす楽しさを実感すること。」と話されたことが印象的でした。運動遊びをしているビデオも見せてもらったのでとてもよくわかり、参加者の方々からも2学期からの授業でやってみたいという声もきかれました。

第2分科会 「自閉症スペクトル(高機能自閉症・アスペルガー症候群)の子どもたちの理解と支援」に参加して

分科会の受付開始と共に、瞬く間に会場が一杯になり、どんどん椅子を入れていくという状況になりました。学校現場では、やはりこの問題が関心を集めているのだということが参加者の関心の高さから伺えました。高機能自閉症、アスペルガー症候群の子どもたちの症状や特性についての理解と、支援の原則や方略、特性を生かした指導のあり方、TEACCHプログラムの進め方など、具体的な事例を取り上げながら説明されて

いたのが、参加者の印象に強く残りました。「特別な支援をしている子どもたちのことをクラスの子どもたちにどう理解してもらうのか」という質問がありましたが、「クラス全員に役立つ支援としてとらえ、特別なこととして考えなくてもよいのでは」と答えられていました。

第3分科会「校内特別支援体制の試み」

堺市立向丘小学校の5年間の取り組み

発表者から

はじめに、「個に応じた指導と校内体制」が確立されるまでの5年間の取り組みについて米田先生が説明された。校内での取り組みとして、『児童一人一人の特性理解(事例研修)』、『一人一人の興味・関心を大切にした指導研究(研究委員会)』、『認知特性の理解(理論研修)』を実施し、職員全体で研修を行っている。また校内研修の中に『個に応じた指導研究委員会』を位置づけ、教育相談・個別支援検討会・個別支援連絡会・ケース会議を行っている。現在に至るまでの5年間の間に様々な気付きがあり、その都度検討を行ってきた。研修を行うことで通常学級担任の気付きも増え、研修を継続していくことの大切さ・職員全体でみることの大切さ・専門家との連携の大切さ・様々な特別支援体制のあり方が見えてきた。続いて、本校の特別支援体制として養護学級2クラス(たんぽぽ学級とすみれ学級)・リソースルーム・通級指導教室での実際の指導例等について各先生から具体的に説明された。リソースルームでは、学習の基礎・基本が身に付いていない為に、学校に来にくい児童や、情緒不安を起こしやすい児童、通常学級での学習に意欲を見出せないでいる児童に、学習の支援、及び、心のサポートをする教室である。本校では様々な取り組みや校内体制の基礎が確立されている為、色々な気付きが増えている。それぞれ個々の課題を見つけ、早急に支援してできるだけ救おうという、目の前の子ども一人一人を大切にしていける気持ちが必要である。

第4分科会「軽度発達障害の基礎講座」 LD・ADHD・PDD等への理解と支援を聞いて

LD・ADHD・PDD等教育に携わる人々の関心が高く、会場は満席となった。軽度発達障害の困難とつまずきの実態理解や対応の方策といった点について、具体的にわかりやすい資料が提示され、様々な事例の紹介もなされた。全体を通して実践・体験に裏打ちされた内容であり、山田先生の子どもに対する暖かいまなざしを感じ、大いに共感を覚えた。時代の養成でもあるが教師には、専門的な力量とともに支援システムの確立が今後切望される。